

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770108

研究課題名（和文）米国モダニズム文学および視覚芸術における宗教的なものへの探求

研究課題名（英文）Alternative Spirituality in American Modernist Fiction and Visual Culture

研究代表者

小林 久美子 (KOBAYASHI, Kumiko)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30634117

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは米国モダニズム小説における物質性と精神性の関わり合いを追求するものである。フォークナーとフィッツジェラルドの作品群から読み取れるのは、制度的宗教の形骸化に対する懸念であり、事物の物質性に新たな啓示を見出そうとする姿勢である。モダニスト作家たちは、事物には人間の支配下には完全に収まりきれないモノ性があると捉え、その「モノ性」が顕現する瞬間を作品内に描くことで、新たな宗教の在処を指し示したのである。

研究成果の概要（英文）：This project explores the hitherto unattended aspect of the interpenetration of materiality and spirituality in American modernist novels. Revisiting the works of Faulkner and Fitzgerald, it articulates the reason why modernist writers repeatedly showed qualms about the inefficacy of disembodied spirituality, and turned instead to the materiality of objects as embodying an alternative spirituality. By focusing on the way each novelist transforms a particular object into something spiritual by exposing its thingness, I suggest that unruly materiality that they recurrently describe can resonate with the alterity of the human subject.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：モダニズム文学 宗教 物質主義 フォークナー フィッツジェラルド

1. 研究開始当初の背景

1980年代における文化及び歴史研究的アプローチの興隆以降、米国モダニズム文学及び芸術研究は、専ら世俗的観点から、人種・ジェンダー・階級といった社会的アイデンティティの構築性を詳らかにするものであった。その代表例としては、当時の多元的文化のあり方を追求した Pricilla Wald の *Constituting Americans* (1995) や Sarah Wilson の *Melting-Pot Modernism* (2010)、移民法の影響を1920年代の文学作品に読み取った Walter Benn Michaels の *Our America* (1999) などが挙げられる。かくも多様なアプローチを誇るモダニズム批評だが、唯一盲点となっているのが宗教的側面への考察で、その欠如は2001年の米国多発テロ以降、複数の著名な批評家たちによって示唆されるに至っている。Bill Brown は2005年の *PMLA* 誌において、文化批評が総じて「世俗」的事柄にのみ専心しているため、現在の米国とイスラム圏の対立を考察する際にも経済格差の側面ばかりが取沙汰されており、信仰の問題が経済にすり替えられているとの見解を示している。また2007年には Laurence Buell が、未だ宗教的アプローチを忌避する米国文学研究の現状は、今日の米国で福音主義派キリスト教の勢力が増大している社会状況に向きあうには至っていないと批判している。かくして米国の政治・社会の諸局面に甚大な影響を及ぼしている、キリスト教的原理主義をはじめとする、大衆的宗教に関わる考察が等閑視されてきたことへの反省が盛んになっているのだが、本プロジェクト開始時は、その呼びかけを实践する批評・研究は十分とは言えなかった。その数少ない例としては19世紀リアリズム文学をキリスト教の説教集との関連で論じた Gregory Jackson の *The Word and Its Witness* (2009)、1960年代以降のポストモダン作家の宗教的発露を非言語空間に見出す Amy

Hungerford の *Postmodern Belief* (2010) があるが、いずれもモダニズム文学を中心に扱うものではない。また Pericles Lewis の *Religious Experience and the Modernist Novel* (2010) もモダニズム文学の宗教性を論じてはいるが、ヨーロッパ文学および哲学に焦点を当てるもので、米国モダニズム文学特有の宗教の在り方に取り組んではいない。そこで本研究では、近代化が進んだ20世紀前半の米国特有の社会・文化を考慮に入れつつ、モダニズム小説において宗教がいかに中心的問題として機能していたかを論じた。

2. 研究の目的

20世紀前半に盛んであったモダニズム文学や芸術を人種・性・階級の視点から見直す文化研究的分析が主流を占めているが、そうしたアプローチに決定的に欠けているのが、今や世界的に問題となっている宗教的なるものへの眼差しである。本研究では、大量消費や科学的労働管理等の物質主義的・合理主義的文化が席卷し始めていた20世紀初頭の米国にあって、民衆にとっての新たな救済となった種々の非-制度的宗教の動きに、フォークナー、フィッツジェラルド等の作家たちがいかなる姿勢を示していたかを、モノ理論の枠組みから考察しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は米国モダニズム文学・芸術における宗教的側面の分析を主眼とするが、これは1950年代の原型批評のように、聖書と文学テキストの関連性を辿るといった限定的な枠組みではなく、1980年代以降の文化研究的アプローチを踏まえた上で、そこに欠けていた宗教的側面への考察を行うものである。モダニズム期におけるアメリカ社会に寄り添った研究を行うためには、当然のことながら、大量消費文化、労働者の疎外化、宗教の形骸化という代表的な近代化現象(平たく言えば、世俗化)を考慮に入れる必要がある。ただし、

1. で述べたように、現行の文化研究のように世俗的側面に特化した解釈を行うばかりでは、本研究の問題設定 かくも社会全体において制度的宗教が周縁化され、モダニストの芸術家たち自身も教会の有用性に強く懐疑的であったにもかかわらず、なぜ彼らは繰り返し啓示的瞬間を描き続けたのかにかんする説得的な解釈にたどり着くことは不可能である。よって本研究が議論の基盤としたのが、2. で触れたモノ理論である。作品内の「物」を「単なる商品」として見なす傾向にあったマルクス主義的批評への批判として提唱されたのが、Bill Brown をその支柱とする「モノ理論」(Thing Theory)である。物を人間中心主義的に捉える(物=人間の生産物)というより、固有の自律性をもつ実体として見ようとする「モノ理論」は、現在最も注目されている理論の一つだが、未だこの枠組みを用いてモダニズム文学・芸術の宗教性を探る試みは皆無である。本研究は、近代米国の最大の特徴の一つである消費文化において、「物」が「商品」であることを止める瞬間こそがモダニスト芸術家たちの見出した新たな信仰の対象であるとする仮説を打ち出し、それを検証することで、モノ理論、そして宗教研究にも寄与せんとした。

4. 研究成果

(1) 消費文化における宗教性

20 世紀前半の米国における消費文化を描いた作品として名高いフィッツジェラルド著『ザ・グレート・ギャツビー』を取り上げることによって、本研究は、「商品流通」という資本主義的生産物の回路から疎外された「ゴミ」が、「商品」であることを止めた存在であるがゆえに、世俗的な立場から脱却し、超越性を有することがあると論証した。

(2) 宗教的空間の拡大

フィッツジェラルドとならば米国モダニスト作家としてウィリアム・フォークナーが挙げられるが、彼は南部というおのれのルー

ツを最大限に自身の創作活動に活かした作家である。北部の大都市を小説の舞台とした作家たちとは異なり、南部の田舎町を中心トポスとすることで、フォークナーは迷信的とも言えるまでに強い信仰心を持つ登場人物を繰り返し登場させた。代表作『八月の光』はその最たるもので、アメリカの狂信的キリスト教信者のカタログとして読むことも可能なくらいに、本作には多彩な狂信者たちが詰め込まれている。彼らは、キリスト教徒であること以外には何か統一的信条を共有しているわけではまったくない。アメリカ植民地時代さながらの厳格なカルヴィニストもいれば、北部由来のリベラルな奴隷廃止論者もいるし、もちろん南部の福音主義派も登場する。本作に関する宗教的考察は、これまでもあまた見られたが、それらはおもに聖書との関連および米国南部特有の宗教文化と結びつけるものであった。だが、上述のように、一口でキリスト教徒と言っても、本作の登場人物たちの場合、「狂信的」であること以外には何も共通点がないため、定型的なアプローチでは、本作の宗教性についての説得的な解釈は呈示不能であると思われる。そこで「超越」という観念を主軸に据えることによって、本作がいかに制度的宗教では体験しえないような超越的感覚を描いたかを考察した。その結果、フォークナーは「超越性」の契機を「家庭」という空間に見出すこととなったとの結論に至った。教会が日常とは違う体験をする場であるとするれば、家庭はまさに日常そのものであるはずだが、フォークナーは、「家庭」を「聖域=宗教的空間」と対置させることで、前者が実は後者を上回る超越的な瞬間をはらんだ空間であることを示したと考えられるのである。

(3) 【日常】という時間と【家庭】という空間が胚胎する超越性

『八月の光』において「家庭」という空間の特殊性を考察することによって、本研究は、

「家庭」という空間に流れる「日常」という時間までもが、じつは通時的な流れとは乖離するような特殊な時制をはらんでいるのではないかという仮説を立てるに至った。この仮説を検証するにあたって、フォークナーの影響を受けた作家として必ず名が挙がる、ラテンアメリカの代表的小説家ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』を取り上げ、両者の比較考察を行った。すると、『百年の孤独』におけるキャラクター造形は、フォークナーの諸作品から看取したものではあるが、本作の特異な語り手が、フォークナーの諸作品には見られない「日常的時間」を描出するものであると結論付けるに至った。「世界創造」を行うという、「日常」にはふさわしからぬ壮大な（＝超越的な）プラクティスが、『百年の孤独』においては、まるで日課のごとく淡々とくり返し描かれているのである。この考察により、あらためて「日常」という時間がはらむ多層性に関心が向くこととなった。

(4) 非 - 制度的宗教の所在

本研究はモダニズム文学における非 - 制度的宗教の在処を探るものであったが、考察の結果、モダニスト作家たちが見出したのは、個々人がそれぞれ体験する超越的な出来事であり、それはありふれた日常のさなかで起こるものである、ということだった。個人による超越的体験というのは、19世紀の超絶主義者たちによってすでに主張されてきたが、彼らはそれを「森」といった社会から隔絶した場において体験されると考えていた。しかしモダニスト作家たちは、むしろ「日常」の中枢にこそ超越的体験を呼び起こす契機が潜むものと捉える。フィッツジェラルドにおけるゴミの山、フォークナーにおける家庭、これらはいずれも卑近なまでに「日常」とかかわっている。もとより小説とは、あくまでも日常に寄り添う物語ジャンルであり、モダニストの小説家たちもその範に従うものではあるのだが、彼らは「モノ」や「家庭」と

いった、日常と切り離せない存在たちの特異性を徹底的に先鋭化する記述を発明することによって、日常を超越的契機をはらむものへと変容させたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

小林久美子、「人間の根源的な状況について」フォークナー、査読無、18号、2016、108 - 122

小林久美子、「フォークナーとガルシア＝マルケスのフラット・キャラクターたち」ユリイカ、査読無、7月号、2014年、177 - 186

[学会発表](計 3 件)

小林久美子、「人間の根源的な状況について」日本ウィリアム・フォークナー協会第18回全国大会シンポジウム、2015年10月18日、「龍谷大学(京都府・京都市)」

小林久美子、「The Great Gatsbyにおける驚異の感覚」法政英文学会総会、2014年10月18日、「法政大学(東京都・千代田区)」

小林久美子、「Why, you're right kind」『八月の光』における慈善、日本アメリカ文学会東京支部近現代文学シンポジウム、2014年6月28日、「慶應義塾大学(東京都・港区)」

[図書](計 1 件)

小林久美子 他、研究社、教室の英文学、2017、39 - 47

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 久美子 (KOBAYASHI, Kumiko)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30634117